

---

# 意馬心猿(いばしんえん)

保科 郁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いばしんえん  
意馬心猿

### 【Nコード】

N9310C

### 【作者名】

保科 郁

### 【あらすじ】

彼氏の態度に悩む、女の子の奮闘記：（？） 意馬心猿とは【煩惱・妄念・欲情などで、心を抑え切れないこと】です。

**（前書き）**

これはテーマ

「心小説」参加作品です。

「心小説」で検索していただくと、他の作家様の素敵作品が出てきますので、ぜひ検索してみてください（＾　＾）

最近 付き合いだした彼。 もう一カ月も経つのに、キスどころか手を握ることもしない。

……私ってそんなに魅力ないのかな？ ちょっと落ち込んでしま  
う。

でも今度こそっ！！

私は彼の家の前で力一杯 気合をいれた。

今日は彼の誕生日だ。それを口実に彼の家料理を作りにいき、そのまま上手く雰囲気を作って……。というのが私の狙いだ。

その為、今日の私の恰好はかなり気合が入っている。

少し胸元が見える位のカットソー。ふわふわの可愛いミニスカート。髪はふんわり柔らかく巻いていて、メイクももちろん抜かりはない。

よしッ！

私はもう一度気合を入れ直し、チャイムに手を延ばした。

「いらっしやい。早かったね」

名前を告げると、すぐに笑みを浮かべた彼が顔を出した。私も笑顔  
を返し「お邪魔します」と、いそいそ靴を脱ぐ。

そして部屋に上げてもらった私は、内心ほくそ笑んだ。だって彼が何だか落ち着きなく、そわそわしだしたからだ。

これは、かなり意識してもらえているに違いない。私のテンションは急激に上昇する。

今日はいける！ いや、いくんだ！！ あとは甘い雰囲気を作り出せば……。

私は燃えに燃えた。彼の傍にさりげなく近付き、そつと身を寄せて座る。彼はビクツと肩を揺らした。

そして私の肩に手をかけ、勢いよく……

私を引き離した。

ショックで私の瞳は大きく見開かれ、徐々に潤<sup>うる</sup>んでくる。やっぱり……。

「私のこと、嫌い……なの？」

抑えようとしても声が震えてしまい、涙がどんどん目尻に溜まっていくのを感じる。

「……ッ、違うー!!」

彼は勢いよく私の方に向き直る。その表情は真剣そのものだ。  
でも……

「私に触れ、てくれない……じゃない……」

言葉が喉に詰まり、うまく喋ることができない。目尻に留<sup>とど</sup>まって  
いらなかった涙が、はら……と零れ落ちる。

彼は思わずそれを指で拭おうとしたのか、手を延ばしてきた。

でも、途中で我に返ったかのように手が震え 静かに降ろされる。  
それを見て、私の心は際限なく沈む。彼を見ているのが辛くて、  
俯<sup>うつむ</sup>いて唇を噛み締めた。

「……違うんだ。君に触れると我慢、できなくなるから。  
きつと君を傷つけてしまう」

そんな、そんなこと気にしなくていいのに！  
私、彼になら……。

私はそつと手を延ばし彼に触れた。彼は身体を震わせ 身を退こ  
うとしたけれど、私が手を離すことはなかった。  
だって、嫌われてるんじゃないって解ったから。逆に こんなに  
私の事を考えていてくれて、嬉しさが込み上げてくる。

「ありがとう。でも貴方になら……何されても……」

今度は恥ずかしさで下を向く。

「本当に、いいの？」

まだ不安を拭いられないのか、彼は恐る恐る尋ねてきた。私は恥ずかしさを堪えて顔を上げる。

「……うん」

その言葉に、彼は本当に嬉しそうに ふわり と笑った。そして優しく私を包み込む。

「もう……我慢しない、よ？」

掠れた声で囁く彼に、私はさらに赤くなりながらも頷いた。

「ああ……」

彼は吐息をもらし、私の肩に顔を埋めると首筋に……

喰らいついた。

……え？

一瞬、何が起こったのか分からなかった。でもすぐに強烈な痛みが走り、私は声にならない悲鳴をあげた。

逃れようと身をよじったけれど、彼は腕を緩めてはくれない。

「本当は、本当はずっとこうしたかった。でも、我慢してたんだ…。」

だって…君の事が見れなくなるからね」

彼は私の首筋に舌を這わす。

ぴちゃり……と湿った音が頭に響いた気がした。

「でも、いいよね。これで君は 僕の身体の一部になるんだから。ずっと……死ぬまで一緒だよ」

かすれゆく視界の中で、彼は口元を赤く染め とても幸せそうに……とても綺麗に微笑んだ。



## （後書き）

副題として、

『食べちゃいたい程 可愛い』

『色気よりも食い気』

です。

まあ、ダークですねゝ（、、；）

意馬心猿<sup>いばしんえん</sup>は、正確には…

（馬があばれ、猿が騒ぐのはおさえがたいように） 煩惱・妄念・

欲情などで、心の乱れを抑え切れないこと

らしいですよ。

諺<sup>ことわざ</sup>ですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9310c/>

---

意馬心猿(いばしんえん)

2010年10月22日01時42分発行